

**信州高遠藩**

**藩校 進徳館**

## 高遠藩 藩校 進徳館

### 高遠の学と藩校の創設

藩校進徳館が創設されたのは、近代の夜明け万延元年（1860）でした。時代の混迷を背景に、藩政改革の一環として人材育成を目指した藩校創設が全国的に相次いだ中、高遠藩にとっても待望の学問所でした。

高遠藩学の起こりは阪本天山に端を發します。高遠において未だ藩校設立の機運もなかった18世紀後半、「学問は観念で終わるのではなく、実用の学であるべきだ。」と主張した天山は、兵学や砲術、火薬製法、大砲鑄造など技術上実用的な

学問研究に打ち込み、多くの子弟にその教を説きました。この天山の学問を受け継いだ中村元恒は高遠藩の藩儒として登用され、天山の教を実践に移しました。そのほか、松田黄牛や星野葛山など天山の門下生により、高遠の学は興隆していきます。しかし、藩の学問所がなかったため、学問を志す者は学者の私塾や寺子屋等でしかその教を受けることはできませんでした。



中村 元起

こうした状況の中、最初に藩校の開設を望んだ藩主は、内藤家7代藩主内藤頼寧でした。文政年間、頼寧は領民の強化策の上から学問を重んじ、また自己修練のために自らも熱心に学問に励みました。幕府の儒官である佐藤一斎を江戸の藩邸や高遠に招き、研修につとめる傍ら、高遠藩にも学問所の設立が必要であると考えました。学問所の設立を切望する頼寧の伺いに対して一斎は『学問所創置心得書』という書を著します。この中で一斎は、儒学を学ぶ上で必須であり備えておかなければならない書物を細大もらさず挙げています。これは学問所に用意する書籍は何であるかということを示したものであり、ここに掲げられた書籍の大部分が進徳館にも揃えられ、現在も進徳図書として伝わっています。このように頼寧は学校設立を計画していましたが、財政が窮迫しており、内外

多事であったため実際の設立には至りませんでした。

同じ頃、中村元恒の子、元起は昌平坂学問所で学び、時の林大学頭学齋の信頼を受け、学頭にまで挙げられます。江戸で一流の学者や知識人と交わった後、高遠へ帰った元起は隠居した頼寧に替わる8代藩主内藤頼直に学問所開設を進言します。頼直は先代の意思を継ぎ、これを受け入れ、藩による学問所を万延元年（1860）閏3月28日に開校し、家老岡野小平治に文武総裁を、師範に中村元起、海野幸成を任命しました。藩校としては、長野県下11藩の中でも遅い設立でしたが、満を持しての創設でした。

こうして開校した藩校ですが、設立当初は「三ノ丸学問所」と呼んでおり、いつから「進徳館」という校名になったのかは明らかで



進徳館外観



教授玄関と進徳館額



絵図に描かれた進徳館

はありません。「進徳館」という校名は昌平坂学問所の林大学頭学齋によって命名されたと言い、易経にある「君子は進徳脩業、忠信は徳の進む所以なり」（1）という言葉からとったと言われています。

進徳館の玄関には、今でも林大学頭学齋の書による「進徳館」という木彫りの額が掲げられています。

学問所の建物は三ノ丸内にあった家老の空き屋敷を利用し、いくつかの付属建物を付け足して使用しました。この建物は茅葺きの平屋八棟造りで、珍しい構造であったといえます。建物内部には教場や生徒控所、寄宿寮と共に聖廟もあり、孔子像ほか四賢

子の像が安置されました。敷地内には槍術や剣術などを学ぶための稽古所も造られました。

- 1 ... 「立派な人格を持った人となるためには、徳を進め、学問や仕事を身につけなければならない。忠信を尽くすことで、徳は進むのである」との意。

### 進徳館の教育

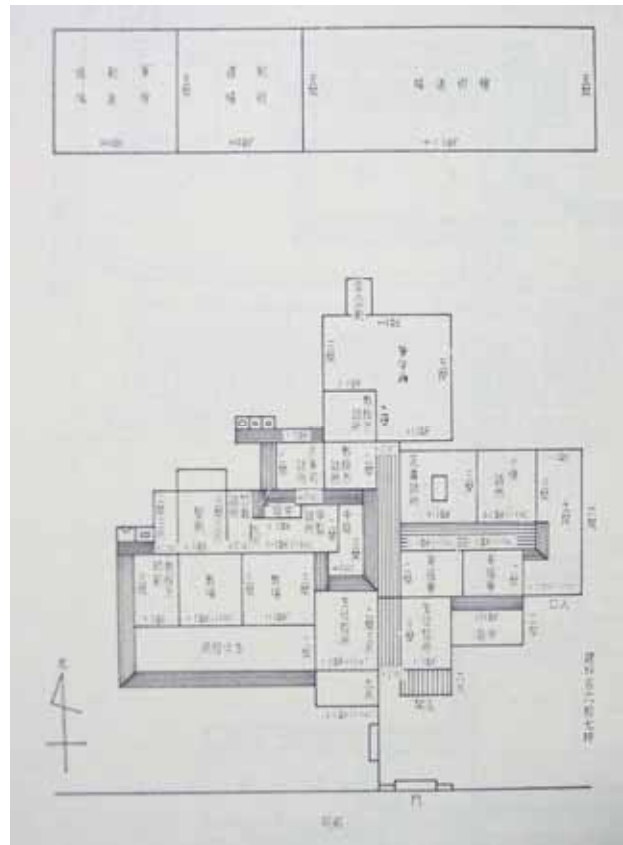
進徳館の就学年齢は8歳から25歳までで、藩士の子弟はその殆どが通学し、8～15歳までが幼年部、16～25歳までが中年部で学びました。校内には寄宿所を設け、17、18歳以上が望みにより入舎しましたが、経費については食料の他は全て藩費により賄われました。

進徳館での教えは朱子学・昌平校派を受けていますが、主に徂徠学派がその中心でした。文学部では儒学（四書・五経・史記・左史文選）、漢学、医学、筆学、習礼、和漢西洋史を学びましたが、後に和学、算学、洋学が加えられました。武学部では馬術、槍術、砲術、剣術、棒術、弓術、体術、柔術、遊泳術、貝、太鼓、軍学に加え西洋式の兵式教練も行われています。

進徳館での在学中、生徒たちが学力をつけるのに



進徳館より受け継いだ進徳図書



学問所と稽古所の間取り図

最も効果のあったのは、文庫の利用であったといえます。進徳館内には開校当時より800部、5000冊余りの蔵書があり、以後時々数百冊ずつ藩から交付され、総数は7000冊を数えました。海外より輸入された希少な書籍も多くありましたが、これらの書籍は自由に読むことができ、生徒はもちろんのこと、教師も寝食を忘れて読み耽りました。

文庫と並んで生徒の学力を高め、識見を高めたものに輪講があります。輪講とは仲間同士が集まり、生徒の一人が経書の一部を講義し、それをもとに質疑を通して皆で自由に議論を行うものでした。この講義は自らの意見を述べるもので、内容の理解がなくては行えないため、思考力を養うためには非常に有効なものでした。このほかにも個別指導も行われ、個性にあった指導方法がそれぞれなされました。

【 授業時間割 】

	午前 8 時	9	10	11	午後 12 時	13	14	15	16
幼年の部 8～15 歳	素 読 (四書・五経など)		習 字		昼 休 み		素読 復習		習 字
中年の部 16～25 歳			輪 講		昼 休 み		会読(集まって同じ書物を読み研究) 英 学、数 学		

いずれも 1、6 の日は休校

進徳館と五聖像

進徳館には昌平坂学問所に倣って聖廟が設けられ、五聖像が祀られました。これらの像は進徳館の創設を祝って領民より寄進されたものです。像の作成にあたっては、絵師が昌平坂学問所に出向き聖人像の絵を模写し、それを元に彫刻師が丁寧に彫り上げたといひます。生徒たちは毎日この五聖像に拝礼し、学問の修業に励みました。



聖廟と五聖像(左より孟子・曾子・孔子・顔子・子思)

藩校の終焉

廃藩置県により明治 5 年 ( 1872 ) 進徳館は廃止されましたが、翌年の学制発布により東高遠に小学校が設立されると、進徳館の建物が小学校として使用され、東高遠の子弟を教育する「進徳校」となりました。明治 19 年 ( 1886 ) には西高遠学校等と合併し、進徳館の建物は教育機関としての機能を失いました。

進徳館には通算 500 人の生徒が学びましたが、藩をあげての学問への取り組みにより、伊沢修二や中村弥六、高橋白山など近代日本や長野県の教育界を支えた多くの優れた人材を輩出しました。学統の確立から生まれた学問と、極めて有能な教授陣を得たことによって、進徳館の教育方針である実学重視の教育はこれほどまでに実績をあげ、高遠藩は小藩ながら長野県内では、北の松代、南の高遠と言われるほどの近代教育の基礎を成したのでした。



明治 42 年の進徳館の様子

【参考文献】

- 北村 勝雄 『高遠城と藩学』(名著出版 1978 年)
- 岡部善治郎 『高遠藩校 進徳のともしび』(ぎょうせい 2004 年)
- 『高遠町誌 上巻 歴史二』(高遠町誌刊行会 1983 年)